

香美市物部町神池地区の 地域づくり支援に関する活動報告 — ココイコ!プロジェクトのタブレット教室 —

本岡 宏一¹ 鈴木 遼太郎² 新屋 文隆³

岡本 享子⁴ 浜田 正彦⁵ 武村 由美^{5*}

(受領日：2016年5月9日)

¹ 高知工科大学環境理工学群

〒782-8502 高知県香美市土佐山田町宮ノ口185

² 高知工科大学情報学群

〒782-8502 高知県香美市土佐山田町宮ノ口185

³ 高知工科大学システム工学群

〒782-8502 高知県香美市土佐山田町宮ノ口185

⁴ 〒782-4523 高知県香美市物部町神池

⁵ 高知工科大学地域連携機構 地域共生センター

〒782-8502 高知県香美市土佐山田町宮ノ口185

* E-mail: takemura.yumi@kochi-tech.ac.jp

要約：本報告は、高知県香美市物部町神池地区が取り組んでいる地域づくり、特にタブレット端末を活用した社会的ネットワークづくりのためのタブレット教室についての報告である。このタブレット教室は地域活性化活動に取り組むサークル活動「ココイコ!プロジェクト」によって開催されており、地域共生センターはこの活動を支援している。学生達は自分たちの活動を通して地域課題を捉え直すという貴重な経験ができ、地区住民にとっては地域づくりに向けた新たな挑戦へのきっかけとなっている。

1. はじめに

本報告は、本学の学生サークル「ココイコ!プロジェクト」が香美市物部町神池地区で開催しているタブレット教室についての活動報告である。

このタブレット教室は、本学の地域連携機構地域共生センターが学生サークル「ココイコ!プロジェクト」に委託する形で今年2月より実施しているものである。

集落再生や集落活性化の目的は何だろうか。集落に活気があった時代の人口に戻るのだろうか。だとすると、その課題解決はかなり厳しいといわなければならないだろう。わが国全体の人口が減少・高齢化している中で、中山間集落の過疎化や高齢化した集落の人口構造は終戦直後の人口増加期と同様にはならないだろう。むしろ集落に残った住民の高齢化は年々進行している。しかし、そうした状況の中でもなんとか地域を維持し、多くの人にわが



図1. 神池地区の位置
(地図データ、画像：Google map)

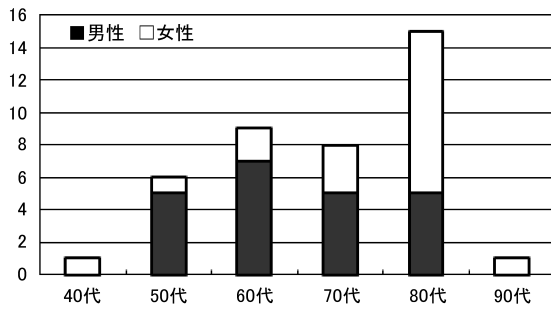


図2. 神池地区の人口構造

村に来てほしいと少ない人数で地域活動に取り組む集落がある。それが4年前から「ココイコ!プロジェクト」が活動をしている香美市物部町神池地区である。

2. 物部町神池地区の現状

神池地区は香美市物部町の北西部に位置し(図1)、25世帯40名(男性20名、女性20名)高齡化率77.5%(データ提供:神池地区)の、いわゆる限界集落である。限界集落論では、65歳以上人口が集落人口の半数を超え、冠婚葬祭などの集落機能が衰退し、やがては消滅してしまう¹⁾とされるが、神池地区では、草刈、祭祀などの集落活動は維持されている。特にこの地区は、神池なかよし会を中心に様々な活動を展開しており、案山子づくりが有名で、刃物まつりにおける案山子コンテストでは、ストーリー性のある表現で第一位のほか何度も入賞している。他にも、小中学校の農作業体験授業の受け入れなど積極的に地域貢献活動を行っており、その点において「限界」とはいえない。

しかしながら、図2の人口構造をみるとわかるように、戦前生まれの80代が最も多く、身体的な衰えを理由に地域活動を引退する人が最近増え始めており、集落活動を維持していくことが困難となりつつある。こうした状況の中、ココイコ!プロジェ

クトが地域に入り、これまで地域が継続して行ってきた地域活動の補助の他に、パソコン教室、地域内外の人々が集える不定期のカフェ、地域の情報を外に発信するための取組みのサポートをしている。

3. タブレット教室

神池地区の地域づくりに、ICTを活用しようということになったが、神池地区には光ファイバーなどの情報インフラは整っていない。しかし、携帯電話の電波塔はすでに設置されていたので、タブレット端末を利用しようということになった。タブレット端末を利用するためには、まずは地区住民が操作を覚えなければならない。そこで、本センターの資金を利用してタブレット端末10台とPC1台を用意した。タブレット端末操作の指導は、「ココイコ!プロジェクト」に依頼し、1年生3名が担当することになった。彼らは、教室開催に先駆けて、神池住民へのアンケート調査、テキスト制作、タブレット端末の初期設定、保守整備などタブレット教室を開催するための準備を行った。

3.1 タブレット教室の開催

タブレット教室の準備から開催に至るまでの活動を以下にまとめた。

12月24日

調査内容打合せ

1月15日

携帯電話会社による

タブレット端末設定に関する講習

(この間3~4回のミーティング)

1月23日

神池地区アンケート調査

(地域・生活・学生活動・タブレット端末に関する調査)

2月11日

タブレット端末初期設定、テキスト制作

2月12日

タブレット教室について打合せ(神池)
(テキスト・指導方法について)

2月20-21日

第1回タブレット教室(図3)

第2回タブレット教室

3月3日

第3回タブレット教室

タブレット教室に関するアンケート調査

4月4-5日

活動についての話し合い



図 3. タブレット教室の様子

第1回目のタブレット教室では、タブレット端末にある7つのアプリケーションの説明(メール、健康手帳、テレビ電話、脳トレ、新聞、インターネット、写真)を行った。第2回目は、1回目の復習と利用者の方の希望にあわせて内容を決定して行った。

今後もタブレット教室は、基本的には毎月1回行う予定である。

3.2 タブレット教室を振り返って

第3回目のタブレット教室を終えたところで、活動について振り返り、今後の活動について検討した。

1) ココイコ!のパソコン教室班に入った理由

本岡 ココイコ!は楽しそうだから入ったけど、パソコンは、他に希望していたところから漏れてこっちに回された。3人とも。だから、意欲はもともとは小さかった。

新屋 最初別のところに希望をだしたけど、こっちにやりたい人がいなくて、こっちに回されてた。たぶん、人数が欲しかったんだと思う。やってみるぶんは自分の経験になるし、いいかなぁという感じだった。

本岡 だから、3人はココイコで知り合って仲良くなって。

2) タブレット教室の感想

本岡 僕がリーダーだったので、調査の設計から調査票づくり、タブレットの設定など全般にかかわったけれど、時間の余裕がなくて、全部がきりぎりになってしまったことが反省点だ。それと、設定を一人でして、自分

だけしかわからなくなってしまったことも。

鈴木 タブレット教室自体は1回しか参加できなかったけど、テキスト作りと最初の設定を担当して、それから、始める前のアンケート調査をした。テキスト作りでは、絵や写真を多用して、文字を大きくして、高齢者にも一目でわかるように工夫して。(教室では)タッチやクリック、スライドなど手触りというか、その感覚を教えるのが難しかった。言葉で説明できなくて困った。それから、何度も繰り返さないと、忘れてしまうので、そこに注意した。

新屋 (高齢者の)生活で、タブレットがなくても生活できているので、(タブレットを使うことに対して)新しく覚えることも多くて面倒くさいのではないかと思っていたけど、実際に家を回って聞いて、タブレット教室を開いてみたら、パソコンよりは使いやすい、キーボードを見ながらやるより、50音でやるので使いやすいと話されていたので、タブレットなら使えるかもしれないと思った。

3) 調査を通して気づいたこと

本岡 高齢者の人でもタブレットを使ってみたいという気持ちがあることがわかってうれしかった。地域の方と話せたのがおもしろかった。関係ないことも話せて和気藹々とできた。

鈴木 自由にヒアリングするのは、話をたくさんしてくれる人はいいいけれど、口数の少ない人の時は困った。アンケートの時に質問内容にはないけれど、対象者の方が話したいことや要望を聞いたことがあった。でも、(言いたいことの)伝え方が難しい。

本岡 聞くことばかりになって、単調になると向こうも話しにくいと思うので、相槌や相手の表情を見ながら、話しやすい雰囲気づくりに気を付けた。

鈴木 二人で回り、会話する役と記録係に分けたおかげで、対話役は集中できてやりやすかった。

本岡 質問をして、関係のない答えが返ってきたとき、質問を繰り返していいのか、その対応が難しかった。それから、地域の方が一緒に回ってくれたので、それがよかった。話に入りやすかった。

4) タブレット教室で気づいたこと

本岡 (最初は) どうしようと思った。(失敗しても) 上手くフォローできなくて、頑張りましょうくらいしか言えなかった。ちょっと触るとどこに行くかわからないから、そこで嫌になるんだと思う。脳トレはわかりやすいのでもう少し活用すればよかった。

鈴木 若者の表現はわからないかもしれないので、そういうところは気を付けたほうがいい。

本岡 笑顔と元気。ぼそぼそ話さない。しゃべり方もゆっくり声は大きく、かしこまった言い方より、親しみやすい話し方で話したほうがいい。

新屋 教え方は、1対1だと(お年寄りの)理解力は高まって、上手く教えられてよかった。1対1はどう教えたらいいかいいかというのを相談できてないというか、自分たちも完全に理解できていなかったことが反省点。これはできない?ときかれても、「もしかしたらできるかもしれない」としか答えられなかった。調べないとわからないことが多い感じ。

鈴木 前で教えるよりも1対1で教える方がいいと思う。

新屋 みんなやりたいことが違っている。電話に興味があったり、インターネットに興味のある人がいて、それぞれが違う。これからやっていくときは、各自に合わせて内容を変えて教えていってもいいんじゃないか。でも、そうすると教える側は大変になるから人数が必要になるので、できれば1年生が入って欲しい。

5) 自分自身が得られたこと

鈴木 人に教えることは面倒くさいイメージがあったけれど、ちょっと楽しかった。大変だったけれどやりがいもあった。あと、高齢者が元気で前向きだったのが意外だった。

本岡 何か特別なことがしくて、企画することが好きだったので、リーダーになった。アンケートを考えて実行したり、タブレットでやったことを全体会で報告したりと、いろいろ経験できた。それから、地域の人が喜んでくれているのを見ると嬉しかった。ただ、タブレットが使えなくなっている人がいること、地域の方々とメールのやり取りなどがやれていないことは気がかりだ。

新屋 ココイコの活動自体が学生の成長に目的があって、老若男女を問わずコミュニケーションをどうやってとっていったらいいかがわかるようになると、自分はシステム工学群なので将来機械をつくる時なんかで、役に立つと思う。簡単なインターフェイスだけど、使い方によってはいろいろ使えるとか、そういう経験があると、そういうことをやっていく時に、人と違うことを、これは絶対必要とされることを見つけられる。そういうモノを創るときの考え方につながれるといい。

6) これからのタブレット教室について

本岡 チームづくりから考えたい。どうすればうまく運営できるか。タブレットの管理・整備とメンテ対応の人が必要だと思う。それから、家から出てこられない人には、こちらから出かけて行ってもいいかもしれない。

鈴木 使うことに慣れてもらって、使えるという楽しみをつくって、繰り返す。

新屋 ココイコ全体として神池に地域外の方々に来てもらうために、ネット上に活動の予告を出して、参加したい方がいたら、ここにメールをください、という形にしたらいい。

タブレットの操作をお年寄りに教えるという経験は、初めてのことだったが、それぞれに一生懸命取り組みそれぞれに得るところがあった。

そしてこの後、タブレット教室の運営や神池のことについて話し合い、次のような目的・目標と課題設定をした。

【目的】

10年後、20年後も神池を持続させる。

【目標】

1. 神池の方々自身で健康管理できるようになる。
2. 一人暮らしの人やあまり出で来られない人と連絡をとり、出て来やすくし、地域内のコミュニケーションを活発化する。

【現状】

1. タブレット教室をひらいたもののあまりタブレット端末を使用してくれていない。
2. 仲のいい人どうしだけのやりとりがほとんどである。

【課題】

1. 地域内で頻繁にタブレット端末を利用してやりとりしてもらうにはどうすればよいか。(仲の

- よい人だけでなく)
2. タブレット教室をどう楽しくするか。どのようにして操作になれてもらうか。
 3. 地域外とのネットワークをどう広げていくか。(家族など)
 4. 何をタブレット教室のゴール地点とするのか。

これらの目的・目標や課題は、神池地区の方々と共に、どのように活動をしていくか一緒に話し合っ、検討すべきであろう。

3.3 神池地区の評価

一方、神池地区の利用者は、タブレット端末の利用について、どのように評価しているだろうか。以下は、神池地区の岡本による評価である。

岡本 タブレットを手にして3ヵ月、最初は「絶対ようせん」「携帯も充分ではないのに」と言っていた地域の人が、3ヵ月の間に教えてもらった血圧測定の記録の仕方、テレビ電話、メールのやりとり、写真の撮り方、送り方等、最初の不安はどこへやら、心配することはなかった。これからも教室の開催時には、大学生に質問してしっかり覚えるつもりである。

今タブレットを持っている人は、健康や地域の連絡等、メールのやりとりができて返信メールがあることで見守りができている。

神池は地域が7班ある。今タブレットを使っているのは5班であり、残りの2班で使ってもらおうよう勧めていくのが今の課題である。

タブレットを使い出して日常の会話の中にタブレットに関するやりとりが聞かれ、笑いがふえたような、今まででは考えられないような会話が聞かれ、また一つ地域を元気にすることができて嬉しく思っている。この研究活動の間に使いこなすことができるように、そしてその後も継続して使うことができるように皆で考えていきたいと思う。

現在、9名の方がタブレット教室に参加してくださっているが、40代から80代の方まで年齢層は幅広い。タブレット教室以外の時間にも地域内でタブレット端末の操作を教え合っ、くださっているようである。3ヵ月が経過し、基本的な操作が問題なく

できるようになり、これからが本番である。

これから地区の方々のも主体性が発揮されるところであり、学生たちや本センターがどのようにサポートできるか、共に考えていくところである。

4. 地域づくり支援

タブレット教室を開催する前、本センターでは神池地区をはじめ中山間地域にどのようなサポートが必要なのかを検討していた。

神池地区住民の高齢化と人口減少を止めることは困難である。しかし、神池に住む一人暮らしの高齢者も決して孤立しているのではない。香美市の中心市街地のある土佐山田町や高知市には子供や孫がいて日常的に付き合いがあり、離れた都市には年に数回戻ってくる家族がいる。この家族の中には将来的にUターンしたいと考える者もあるだろう。また、圧倒的に80代の一人暮らしが多いことを考えると地域外にいる家族と集落の人々とのネットワークを築いておくことは必要である。

そして、高齢期になり、車の運転ができなくなると地区住民の行動範囲が狭まること、また、生活に必要な買い物や病院通いなどの交通費が家計の負担となってくることなど高齢者の生活面の支援が必要になると考えられる。その時、山間集落の距離のハンディキャップを乗り越えるためには、現時点ではICTの活用が有効であるだろうと考えたが、果たして、高齢者がICTに関心を持ち、使いこなすことができるのか、ということが疑問だった。

そこで、携帯電話会社が高齢者向けに開発したアプリケーションソフトを使って、先進的に実証実験を行っている長野県天龍村を訪ねて実際の状況を確認することとした。

4.1 長野県天龍村の視察

長野県天龍村は、静岡県との県境にあり、急峻な山に囲まれた小さな村で、タブレット端末をつかった見守りの実装実験を始める前は携帯電話のつながらない地域もあったそうである。

小さな村だけに役場の職員がお年寄り一人ひとりの家の事情も知っており、放っておけない状況が増えていた。職員が直接家庭を訪問し、実際に顔を合わせて話をする方が良いことはわかっているが、急峻な地形、まばらになった家々、厳しい財政、縮小する役場の規模、足りない人手など、タブレット端末を利用した高齢者の見守りの社会実装実験を開始した背景には、やむを得ない事情があった。

携帯電話会社のアプリケーションソフトは、手書

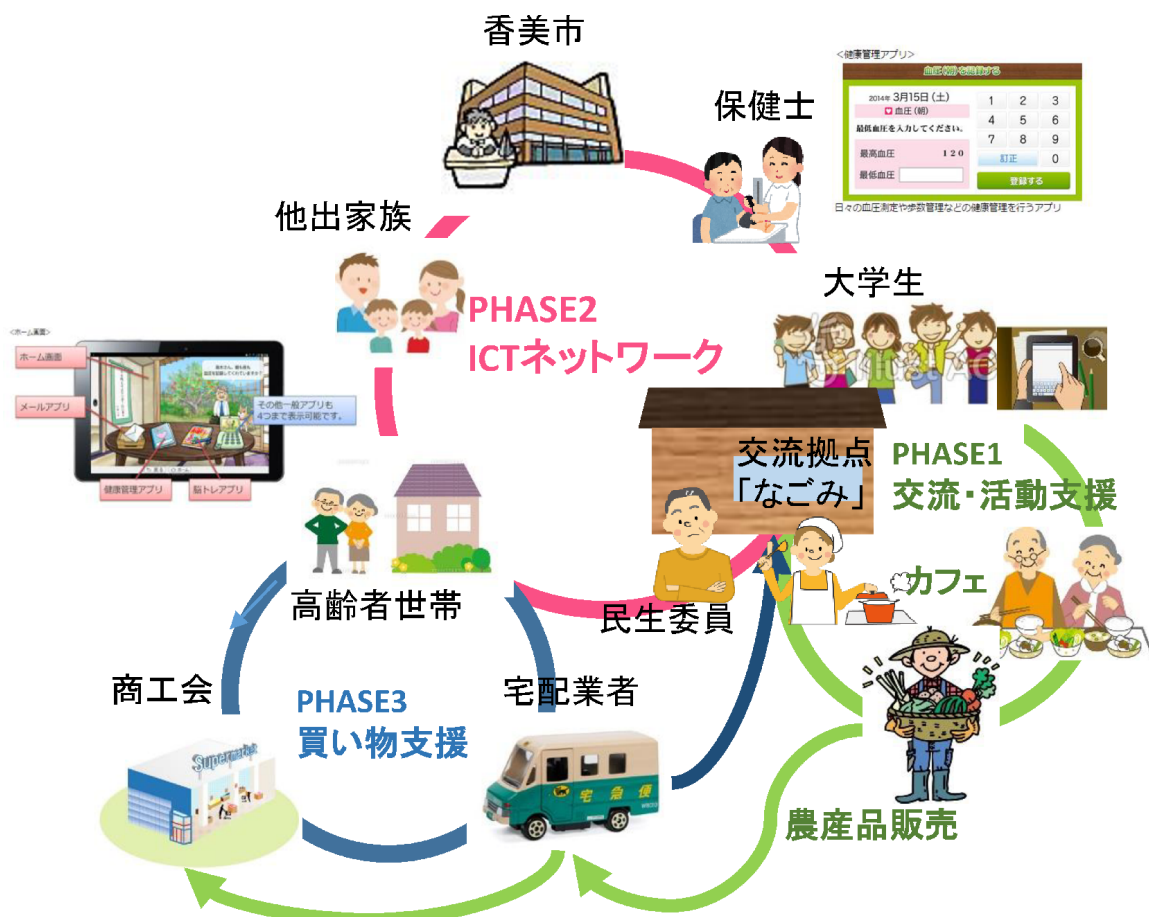


図 4. 神池ネットワーク（仮称）

きのメールソフト、朝晩の血圧と歩数、脳トレ結果を指定したアドレスに一定期間で自動送信し、設定された側が安否を確認できるというものである。手書きメールはキーボードを覚える必要がなく、お年寄りには使いやすい設定になっている。

天龍村では導入にあたって、まず 20 名を募集し、実装実験でうまく運用できれば、村全体にタブレット端末を配布する予定であるという。

高齢者への操作説明は、携帯電話会社の社員と役場職員が高齢者宅へ出向いて行い、2 週間ぐらいは、操作ミスや問い合わせが多かったが、それ以降は問題なく使えているとのことであり、高齢者でも問題なく使えることを確認した。

4.2 神池ネットワーク（仮称）の提案

天龍村の事例を参考に、神池ネットワーク（仮称）を描いてみた（図 4）。神池ネットワーク（仮称）は、交流拠点である「なごみ」を中心とした地域内の交流促進と地域外の社会的ネットワーク（公的機関や民間サービス、他出家族など）を新たに構築しようとするものである。

神池地区でどのような社会的ネットワークを築く

かについては、住民が主体的に決定し、構築していく必要がある。無論、図 4 であげた社会的ネットワーク以外にも必要な機能があるだろうし、それは地域により異なる場合もあるだろう。

いずれにしても、ネットワークづくりでは地域の主体性が発揮されなければならない。

5. おわりに

まず、集落人口の減少と高齢化が進行しても、なお持続可能な地区にしようと様々な活動に取り組んでおられる神池地区の方々と休日を利用して神池地区の活性化に取り組んでいる学生達に敬意を表したい。

本活動を通じて、学生達は、現実の社会問題に取り組み、自分達で考え行動するという貴重な経験を積んでいる。そして、学生はタブレット端末の操作を教え、地区住民は、山村の暮らしや農作業、生活技術を教えるという互恵関係が築かれており、図 4 の神池ネットワーク（仮称）でいうならば、PHASE1 の「交流・活動支援」である。今後も発展的に活動が維持されることが期待される。

最後に、神池地区の持続性を高めるためには、やはり一定数の定住者は必要であろう。そのためには3つのアプローチが同時に行われる必要があると考えている²⁾。

第一に、現在神池で暮らしている人に、少しでも長く生活を続けてもらうことである。特に80代の人の健康寿命を延伸することが課題である。

第二に、団塊世代出身者のUターンをどのように実現するかが課題となる。

そして、第三に、これが最も難しいと考えられるが、20~30代の孫世代に、神池でうまく暮らせる方法がないか、出産や子育てが実現できるかどうかについて、一人でも多くの人に考えてもらうことが必要であると考えられる。

地区継承の問題は、一人ひとりの人生の問題でもある。最期まで神池で暮らしていけるという確信がなければ、新たな定住者は生まれまいだろう。その意味においても、現在の80代の暮らしは重要であると考えられる。

これら3つのアプローチを展開する上で、タブレット端末は効果的な道具として活用できる。

例えば、80代の高齢者には、見守りや健康管理、地区内外のネットワークづくりや神池地区の様々な情報発信をすることもできる。また、SNSを利用して交流が密になれば、直接神池を訪れる人も増えるのではないかと。そうした人々の中から移住者が現れる可能性もあるのではないだろうか。そうした期待をもっているのである。

神池地区の地域づくりはまだ緒についたばかりで、どちらの方向に向かっていくのか、まだ決まっていない状況である。神池地区がどのような社会的ネットワークづくりに取り組んでいくにしても、生活インフラを維持するためにも今後は自治体など公的機関との連携が重要になってくるだろう。先にも述べたようにコミュニティ・レベルでの価値判断を重視しながら地域の課題解決のために本センターも寄与していきたいと考えている。

謝辞

タブレット教室にご参加いただいている神池地区の皆様、ココイコ!プロジェクトの学生達、タブレット教室以外でもこの研究活動にご協力いただいている関係者の皆様に改めて心よりお礼を申し上げますとともに、今後ともご支援ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

文献

- 1) 大野晃, “限界集落と地域再生”, 京都新聞出版センター, p. 21, 2008.
- 2) 山下祐介, “限界集落の真実 — 過疎の村は消えるか?”, ちくま新書, 2012.

An Activity Report about Supporting Community Improvement for a Marginal Village

— A Case Study of a Tablet PC class by University Students —

Koichi Motooka¹ Ryotaro Suzuki² Fumitaka Shinya³
Takako Okamoto⁴ Masahiko Hamada⁵ Yumi Takemura^{5*}

(Received: May 9th, 2013)

¹ School of Environmental Science and Engineering, Kochi University of Technology
185 Tosayamadacho-Miyanokuchi, Kami, Kochi, 782–8502, JAPAN

² School of Information, Kochi University of Technology
185 Tosayamadacho-Miyanokuchi, Kami, Kochi, 782–8502, JAPAN

³ School of Systems Engineering, Kochi University of Technology
185 Tosayamadacho-Miyanokuchi, Kami, Kochi, 782–8502, JAPAN

⁴ Monobecho-Kamiike, Kami, Kochi, 782–4523, JAPAN

⁵ Center for Local Sustainability,
Research Organization for Regional Alliances, Kochi University of Technology,
185 Tosayamadacho-Miyanokuchi, Kami, Kochi, 782–8502, JAPAN

* E-mail: takemura.yumi@kochi-tech.ac.jp

Abstract: This activity report is about supporting community improvement for a marginal village Kamiike, focusing on a case study of a tablet-PC class by university students. This tablet-PC class was organized by a student group “Kokoiko project” under the support by the center for local sustainability. Through these activities, students got experiences of project management and residents of Kamiike village got a chance to start community improvement with tablet-PCs.